

金哲著、渡辺直紀訳『植民地の腹話術者たち』書評会傍聴記 A Report on A Book Review Meeting; Kim Chul, *VENTRILOQUISTS: Reading Colonial Korea Through fiction*, Trans. Naoki Watanabe

逆井 聡人

SAKASAI AKITO

東京外国語大学世界言語社会教育センター

Tokyo University of Foreign Studies, World Language and Society Education Center

キーワード

朝鮮近代文学 植民地研究 翻訳 二重言語話者 金哲

Keywords

Modern Korean Literature; Colonial Studies; Translation; Bilingual; Kim Chul

Quadrante, No.20 (2018), pp.71-73.

本稿は、2017年7月7日に東京外国語大学海外事情研究所で開催された金哲著・渡辺直紀訳『植民地の腹話術者たち——朝鮮の近代小説を読む』（平凡社、2017年）の書評会の傍聴記である。各書評者の発表内容は本特集に掲載されているため、この傍聴記では主にフロアで行われた議論と、その場の雰囲気を書き記すことを目的とする。ただし、傍聴記という形式上、筆者（逆井）の主観を通じた再現となるため、発言者の意図を曲解している箇所もあるかもしれないことを予めご了承ください。

まず初めに、東京外国語大学の岩崎稔氏による金哲氏と訳者の渡辺直紀氏の紹介があり、また本会が企画された経緯が簡単に説明された。その後、司会の渡辺氏が進行を引き継いだ。既にこの最初の紹介の段階で、渡辺氏と岩崎氏、そして発表者を含めた参加者の多くが金氏と長年の強い絆で結ばれていることが伝わり、会はそうしたアットホームな空気の中で始まった。

発表は波田野節子氏、五味渕典嗣氏、柳忠熙氏の順番で行われた。その後、金氏の発表に対する応答となったが、金氏は個別の発表の問題提起をフロアの参加者と議論するとして、代わりに本書が書かれた経緯と当時の状況、また本書で問われた問題が朝鮮文学に留まらないものであることを述べた。例としてインド系アメリカ人の作家ジュ

ンパ・ラヒリ（1967年～）の創作活動と植民地期の朝鮮文学者たちとの相似性について語った。本書の書名と同じタイトルがつけられている第12章（「植民地の腹話術者たち」）でも、「帝国の言語」である英語を使わざるを得なかったインド出身の作家たちへの言及があるが、改めて帝国の言語を創作言語として選択するというに伴うナショナルな枠組みに向けた批評精神の有り様について論じた。

休憩を挟んで、参加者も交えた議論が行われた。議論の口火を切ったのは西成彦氏（立命館大学）で、五味渕氏の発表で言及された、金史良^{キム・サリヤン}「郷愁」における弟・李紘のセリフが初出時（1941年7月）は「待ちなさい」であったのに、単行本収録時（1942年4月）には「お待ちください」へと変化していたことに関してであった。西氏は、朝鮮語では年上の家族に対して敬語を使うことが一般的であるために、単行本収録の際は朝鮮語の感覚に寄せたのだろうという推察を述べる一方で、その変化こそが翻訳の問題、言語選択の際の精神の置き場という問題に密接に関わることを指摘した。

そこから、波田野氏の発表後半に触れられた「方言の翻訳」の問題へと議論が展開した。原文では方言で書かれた登場人物の言葉が「透明な」言葉として「標準語」へ翻訳される際、原文が本来持つ言葉の力学が漂白され、中央集権的暴力に晒さ



れる。一方、波田野氏は、例えば咸鏡道方言が九州の訛りに変換されてしまう¹と、日本のその地方に付随したイメージが出てしまうという問題点を挙げる。議論はそこからあまり進まず、結局翻訳者の選択の問題という方向に行ったが、波田野氏が発表の中でも述べたように韓国の若い作家が最初から翻訳を考えて「無色透明の文体で書く傾向」が実際にあるとしたら、それは明らかにグローバルの名の下に抑圧的な力が働いている印であり、単に翻訳者の選択の問題で終わってはならないのではないか。

その後、米谷匡史氏（東京外国語大学）から尹致昊^{ユン・チホ}の日記における言語選択と、尹致昊の朝鮮、日本、中国、アメリカという移動の経験がどのように連関しているかという質問があり、これに対しては、最近、尹致昊を主題に博士論文を執筆した柳氏からの応答があった。柳氏は、尹致昊の移動の年とその時点での言語能力について詳細に解説し、尹致昊の言語選択とそれぞれの場所と時間の経験が言語選択と密接な関係にあることを示した。

他に、文弘樹氏（クライン）と温又柔氏（作家）から、二重言語者が「日本語で叫べば叫ぶほど、自らの身内から遠ざかり、同時に日本語使用者にも不可解な何者かとして残される境遇」（本文、166 頁）という箇所、また柳氏の発表でも「結果的に内地人と半島人両方に受け入れられない運命」という言及があったが、その部分についての補足説明を求める場面があった。これは筆者（逆井）のうがった見方かもしれないが、文・温両氏は指摘した文言の背後に、二重言語者に対する行き過ぎた要求のようなものを感じ取ったのではないか。というのも、本書の最も重要なテーマである「腹話術師」という像は「一つの口で二つのことを話す者、二枚の舌を持った者」（本文、168 頁）であり、この「きわどいゲーム」に自身をすり減らしながらも、「母語の自然性、国語のアイデンティティ、国民文学の境界に対する鋭い刃」（同頁）となる者である。もちろん金哲氏は、従来「裏切り」のように評価されてきた植民地期における日本語での創作を、再評価する意味で二重言語者が「鋭

い刃」であったことを強調したわけであるが、そうした批評的良心を一旦保留した上で翻って考えると、母語に安住できる側の人間が二重言語者に国家あるいは権力に対して「鋭い刃」であることを求めるのは、ある種の利用主義に陥る危険性を孕んでいるのではないか。会場の議論ではここまでの発言があったわけではないが、この議論の最中は、一定の緊張感があったように感じた。

また本書の位置付けについても、高榮蘭氏（日本大学）から発言があった。本書は韓国で 2008 年に出版された『腹／複話術師たち——小説で読む植民地朝鮮』（文学と知性社）の邦訳である。そのため最初の出版からすでに 10 年近い時間が過ぎており、韓国だけでなく、日本、そして世界の状況も大きく変わった。殊に現在の韓国文学研究においては、本書が批判した「抵抗か、迎合か」のナショナリスティックな二者択一の傾向はかなり相対化されてきており、むしろ「植民地が近代であり、近代が植民地である」（本文、13 頁）という視点の当時の新規性と重要度が薄れはじめ、ともすると「植民地近代化論」に囲い込まれる危険性にすら注意しなければならない状況である。そのような状況の中で、改めて本書が持っている本質的な意味での近代論が再確認される必要性があるということが発言の意図であったかのように感じた。

以上のような質問及びコメントは一見それぞれ別個のもののように、実のところ根底で共有されていることがあるように感じた。周縁的な行為として貶められていた翻訳、方言、言語の選択こそが、近代的言語を創造する過程において重要な役割を担ったと同時に、言語の標準化、均一化を推奨する国民国家のシステム、あるいはそれを前提とした民族主義を揺さぶるものであるというのが本書の重要な主張である。しかし、一方でそうした作家たちの営為の周縁性をあえて評価する際、再び近代の構造の一部として回収されてしまうことに対する違和感が拭えない。言語を選択する作家の苦悩と貢献が語られる時、その現場に働く力学をどの立場から評価するのか、誰が誰に「鋭い刃」であることを求め、その成果を享受するのか、そのような「きわどいゲーム」（本文、168 頁）あるいは倫理的葛藤が、著者金氏をはじめとした

¹ 李泰俊著、熊木勉訳『思想の月夜 ほか五篇』（平凡社、2016 年）の例、波田野氏の発表で言及された。

討論者の多くに共有されていたように思える。

会場からは他にも成田龍一氏（日本女子大学）をはじめとした発言²があったが、紙面の関係上、議論は和やかでありながらも大いに盛り上がりを見せたことを言及するに留めておく。また、全ての議論は金景彩氏、関東曄氏（共に東京大学大学院）による逐次通訳によって行われたことを記しておく。

それにしても、改めて翻訳という作業がいかに重大なものであるかをひしひしと感じさせられるような書であったということを最後に書いておきたい。訳者である渡辺氏は「訳者あとがき」で本書の翻訳をめぐる苦悩について述べている。曰く、金氏の「民族主義的な論調に対する距離あるいは批判」が日本語に翻訳されても、現在の「見たいものしか見ない修正主義的な論調」のある「日本の読書界では単に曲解や揶揄のネタにしかされないのではないかという憂慮を強く持った」。近年の日韓関係の息苦しさは、かつての「良心的」日本研究者の韓国研究者との連帯を促すような余裕を持たせてくれない。韓国（朝鮮）文学・文化研究に関わる、あるいはその周辺にいる人間たちにとって、韓日アカデミアの文脈のすれ違いは、ほんの些細な日常場面であっても神経過敏になるような状況である。このバランスを取りつつも傍観者でいることが許されないような空気の中で、渡辺氏が本書を「きわどい精神の曲芸」のように訳出されたことに、若手としては非常に心強さを感じる。また新米の教員としても、あらゆる場所で参照できる朝鮮文学についての日本語の本が登場したことが本当に有難い。

² 成田氏の発言は、成田龍一「[書評]141 金哲『植民地の腹話術師たち』、あるいは植民地経験の考察について」『UP』（東京大学出版会、2017年8月）に基づいて行われた。